

老年期における発達課題と基本的信頼感

- 高齢者の人生物語より -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域

「エリクソンさんは、お年寄りにとってどのような意味があるのでしょうか？」、この質問は、修士論文の中間発表の機会を与えていただいた質的研究会の際に A 氏から受けたものである。調査者はこの短刀直入な本質をついた質問にうろたえて、その場では要領を得た返答ができなかったが、この論文を作成中もずうっと脳裏の片隅にひっかかり、考え続けた。高齢者たちが歩んだ長い人生のなかで、その一つひとつがまたとない唯一無二な存在として、その人独自の色合いを帯びた語りが紡がれて人生物語がつけられる。それは、いわばその人の人生の集大成として姿を現し、老いの現実には投影される。

高齢者の語りは、まるで、ゆっくりと重い貨車が動き出すのと似て、日常のことがらがぼっぼっとゆっくり語られ始め、会話がはずみ心と体のエンジンがかかると加速し、仮面のように硬かった表情に生気が蘇り、実に生き生きと豊かになっていく。その様子は、これが先程までしんどいといっていた横になっておられた同じ人物かと見間違えるくらいである。

超高齢化社会を迎えて寿命は延び、認知症（痴呆症）や介護といった医療的な研究は進みつつあるものの、高齢者の生きがいなど心理的な側面についての研究は少なく、これから期待される分野である。ある程度の健康を維持しつつ老いを迎えている高齢者の研究は、ほんの少数しか見られない。

この研究では、高齢者の人生物語から「老い」や「人生」をどのように意味づけているのか、またその人生を振り返り、「幼少期の関係性」がその生涯にわたってどのように影響を与えているのかを「老いの現実」と照らし合わせて検討している。このことは、精神分析的な無意識の衝動に還元する立場に立つものではなく、幼少期に培われた関係性を原型にして、依存的でありながら能動的に環境にかかわり、生きていく上で適応的に多様な能力を発達させるという「生涯発達の可能性」を検討するものである。生きることを断片的ではなく、人生物語として捉え、内面的な軌跡を理解しようとする試みである。その内面の発達を理解する際に、Erikson, E.H. の発達理論を根拠とし、「老年期の心理」と「幼少期の関係性」を生涯発達から捉えて、その関連性を検討している。

聞き取り調査は、軽費老人施設で行い、対象者は入居しておられる高齢者 3 名である。協力的な高齢者 10 名の中から、特に話の内容が豊かな 3 名の方を選んだ。分析は、主に KJ 法（川喜多，1967, 1970）質的分析法を参考にして行った。まず書き起こしたエピソードを発達に沿って時系列順に並べて構成して、それぞれの人生物語としてまとめた。エピソードを区切り、カードにして、内容に即した見出しをつけて、小グループから、中、大グループへと編成し、その意味内容に即して事例ごとに物語を図式化した。小グループの編成を発達に沿って時系列順に並べて構成して、幼少期の関係性、青年期の関係性、老いの現実、人生の意味と人生テーマ、対象者三名の人生物語の相違

点と共通点， これからの人生などの特徴を抽出した。そのうえで， 老いの現状を発達上の問題に関連させて考察した。また， 調査者との関係における語りの変容についても考察し， 最後には， 不適応状態にある高齢者への援助の可能性について言及している。

考察の結果，「老いの意味づけ」では，満足と安らぎに満ちた適応的な老いと不安や孤独に悩み，生きる意味が見出せずにいる不適応な老いという「老いの現実」が「適応」と「不適応」に二分されていることが明らかになった。

総合考察では，老いの不適応状態を理解するために，生涯発達における未解決な問題に注目し，その問題がどのような影響を与えているのかということを論点に考察している。不適応の要因としては， 幼少期の見捨てられた喪失体験， 幼少期の差別や教育の未経験など否定的な体験が推測でき，そうした経験が老年期の抑うつ感情と結びついて人生への絶望と自己の命の軽視につながっていることが明らかになった。

最後に，不適応状態にいる高齢者への援助について，ナラティブ・セラピーを援用し，支持的に受容していくかわりを通して，高齢者の否定的な自己物語を肯定的なものへと書き換えることの可能性があることを示唆している。

調査者は当初，Erikson，E.H.の発達理論をそのまま日本女性に当てはめて説明できるかどうか不安に感じていたが，三人の老いを分析したところ，それぞれが，「老年的超越」，「統合・英知」，「親密・孤立」という Erikson，E.H.の発達理論の各段階にぴたりと照合できたのには実のところ驚いた。高齢者を通して「老い」を理解していこうとするとき，Erikson，E.H.の発達理論は，老いに至る内面世界の軌跡をたどり，その独自の過程が意味するところを探る上で，性差，民族を超えて有用であることがこの研究で図らずも実証できたといえよう。